

詩 七 篇

松 村 二 郎

(一)

冬 太陽は氣嫌が悪い。

乞食は太陽の阿諛者である。

氣嫌のよい日には

芥箱の犬を追拂つては

乞食は餌を漁つて行くのだ。

蓆袋に投げ入れる掘出物は

貴重なその日の糧カネである。

人は贅澤だと云ふ

自分は犬だと思つてゐる、

さうして

人類はいつも嘲笑されてゐる、

太陽が險惡な日

餓えた火は一事に燃え上る

君放火罪で曳かれて行く乞食を

あの喜々としたすました顔を見給へ

歴史は古紙の寄せ集めにすぎないと云ふ、

太陽が一週間もすねると

乞食は官憲の目前で慥と物を盗んで見せる

餌の保證を與へられるんだぜ

味は忘れねえや

太陽様は有難てえと云ふ。

ぼくはどうしてか知らない。

(II)

初冬の雨はねつちりと寒し、  
舗道に落着きのない足の運び  
カラカラカラカラ

濡れたビルディングの重たい壓迫に  
斜に深く蛇の目傘が――

東洋の雨！

銀行街の石にむせぶ下駄の深い調和  
カラコロ　カラコロ

(III)

ボオー　ボオー

國境を越えて來た汽車は

錆びた頑丈巨人の倦怠である、

彼岸に霜を耕す男は

馬賊の髯を夢みてゐる、

冬眠！

突破事件！

驛夫は懶い灰色の眠を覺す

さうして

一人切りか無い乗客

ボオー　ボオー

北邊に物音もなく更け行く初冬のステイション。

（四）

ぼくは晝寢から目を覺ます

すると　外はいつも薄濁つた夕闇を思せる

だが時計はボンボン　ボーンと

三時しか打たないのだ。

（五）

a なる良心と

b なる人間味は平行線だ

c は a b に平行なるか交る

平行線 c は成功であり

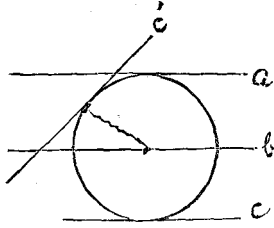
交叉線 c は敗慘である

十六億の人類は b を中心とし

a c なる平行線に接する圓上の點にすぎない

ぼくは圓上の各點に接線を引く

すると人の性質は皆手に取る如く判然するのだ。



(六)

想像の女は美しい

現實の女には倦うが來るだらう

すると

ぼくは一人が一番いゝ様に思はれる。

(七)

ぼくは

一切を肯定しよう

宗教家よ

ぼくを

笑ふことは君の勝手だ

ぼくは

逃避を先づ信じたのだ。